

1 研究テーマ

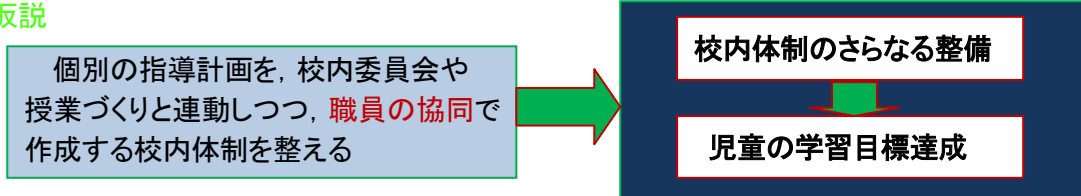
読み書きを苦手とする児童の個別の指導計画の作成と有効活用による支援のあり方

2 はじめに

年度ごとに作成している個別の指導計画を、十分に活用していくことが所属校の課題である。個々の児童の障がいの状態等に応じた指導内容・指導方法の工夫を検討し、適切な指導を計画的、組織的に行うために、個別の指導計画の作成と有効活用による支援のあり方を探ることとする。

3 研究目的

(1)研究仮説

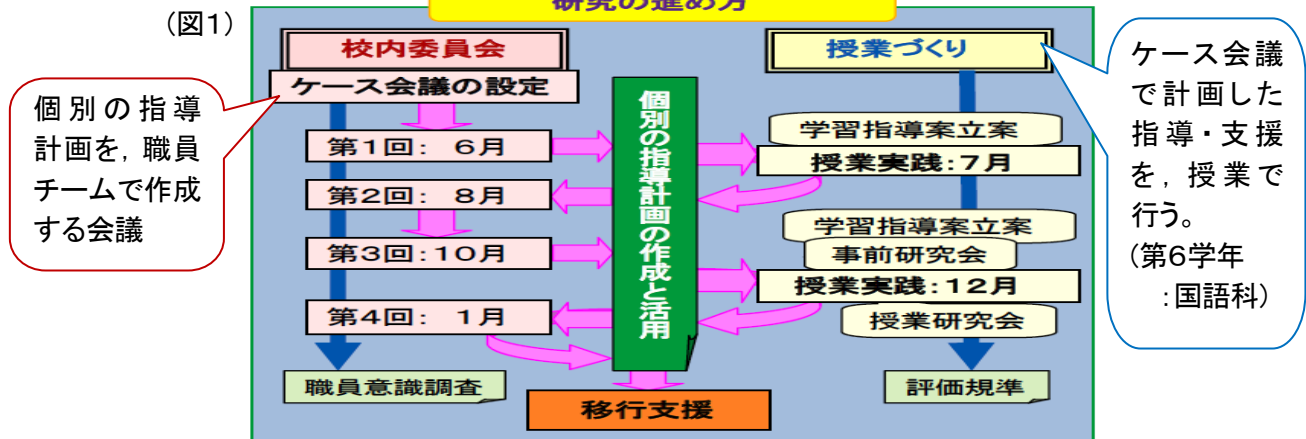


(2)研究目的

個別の指導計画の作成と活用を推進するための位置づけを校内体制の中で明確にし、職員間で児童の実態把握や情報共有を図る。職員の協同により作成した、読み書きを苦手とする児童の個別の指導計画を活用しながら、国語科の授業における学習目標の達成をめざし、個への指導・支援のあり方を探る。

4 研究内容

(1)研究の進め方

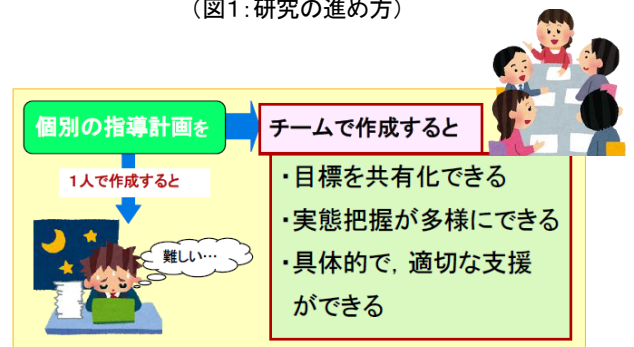


(図1: 研究の進め方)

(2)研究の実際

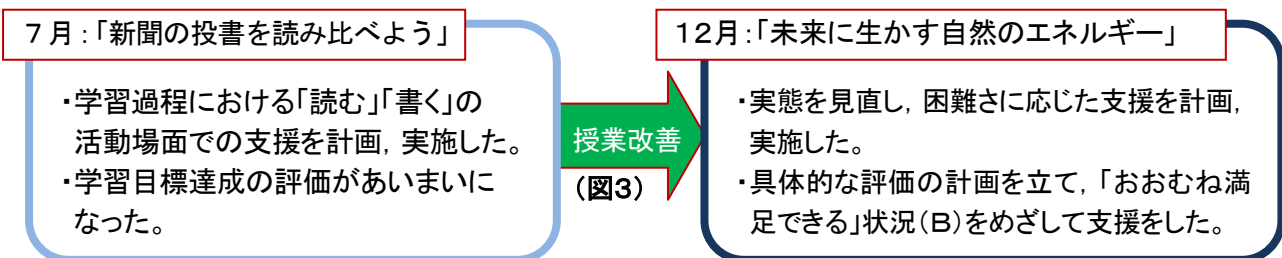
① 校内体制による個別の指導計画の作成

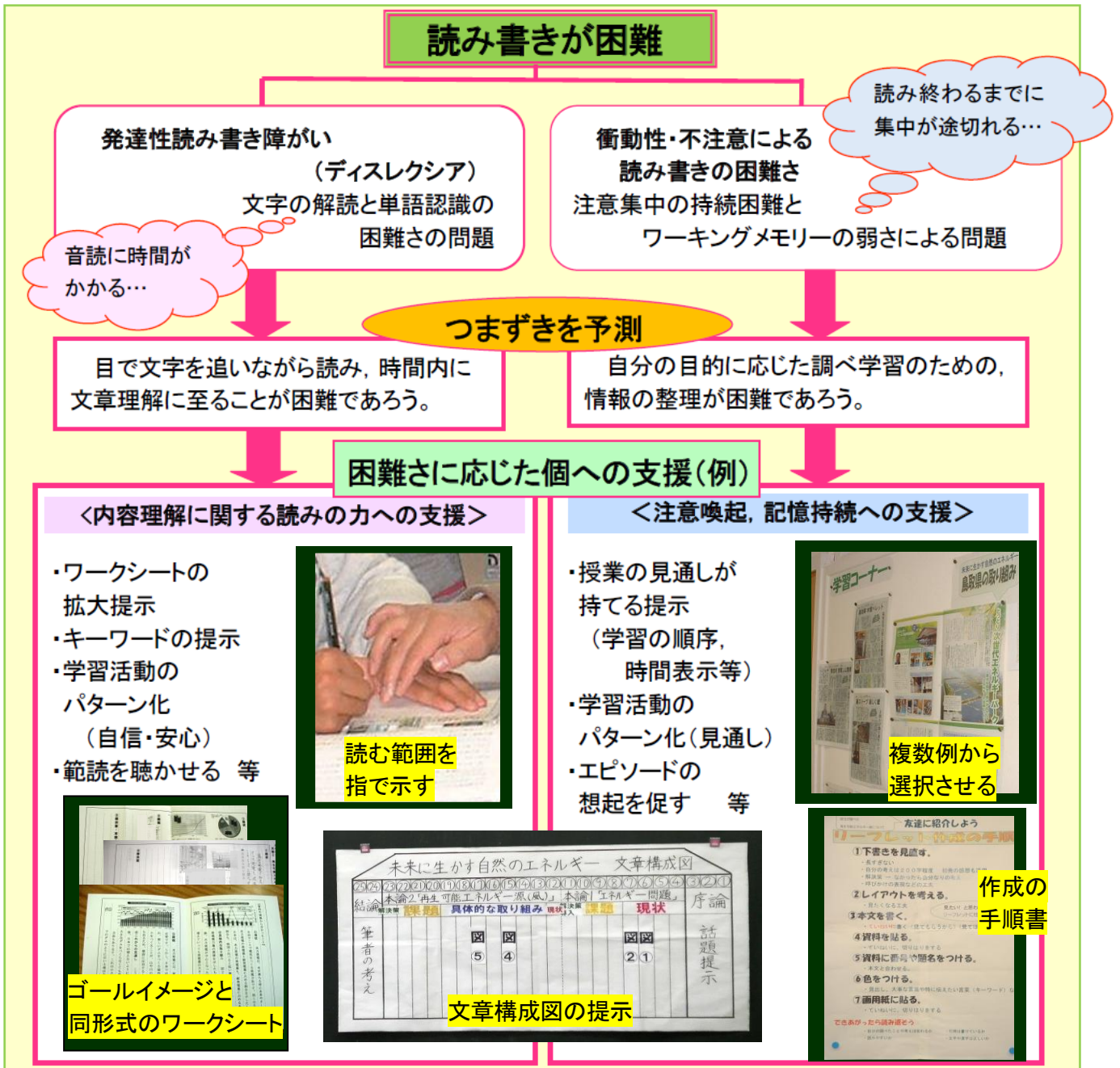
- ・職員連絡会で、個別の指導計画の意義とチームによる作成の目的(図2)の周知を図る。
- ・ケース会議の日程調整、進行の仕方の打ち合わせを、事前に関係職員で行う。
- ・LD等専門員による巡回相談との連動
- ・上、下学年のチームに分かれてケース会議を開催し、PDCAサイクルに沿って話し合い、作成する。



(図2: チームによる作成の目的)

② 授業実践による個別の指導計画の活用





(図3: 理論と観察に基づく実態把握と支援)

(3) 研究の結果

① 校内体制による個別の指導計画の作成について

- 職員チームで作成するケース会議が開催でき、作成のしやすさが向上した。(図4)

② 授業実践による個別の指導計画の活用について

- 個別の指導計画を、PDCAサイクルに沿って授業づくりに連動させながら活用することができた。

5 研究のまとめ

- 個別の指導計画をPDCAサイクルに沿って情報共有と授業づくりに活用したことで、教育課程の具体化という意義が職員間に浸透したことから、年間のケース会議開催につながったと考える。

6 今後の課題

- 教育課程全体における指導・支援及び、校内委員会、支援会議等での連携を充実させていく。

7 おわりに

校内体制における組織的な情報共有。PDCAサイクルに沿った計画的な指導・支援。これらの実現が、個に応じた指導の充実につながる。今回の研究成果の継続と、さらなる推進に努めていきたい。

